皇紀二千六百年の佳歳を迎へ、それを記念すべき各種の計畫のあつた中で、その劈頭一月、大阪府立圖書館では國史關係書の善本を蒐集展觀された。到つて地味な催であるから、一部學界を除いてはあまり世人の注視を得られなかつたが、我が史學界のためには、此上もなき結構な計畫であつて、吾人數日に亙りて拜見に出かけ、これら善本に接して、書籍のみの持ち得る特別の味に親んだのであつたが、またそこから汲み出された日本の味を、醰みしめ醰みしめてしたものであつた。今やその中の代表的なもの八十數點が、殆んど原寸大の高級玻璃版として印影出版された事は、實に恰好の記念事業でなくて何であらうか。

收むる所、伊勢大神宮儀式帳以下若干の神祇書の外に、記紀以下の六國史や大鏡榮花物語正統記の如き通史に屬するもの、延喜式北山抄等の法制書に附するに諸家の日記類や系譜地誌の類にまで及び、歴朝紹述の遺烈を肅慕し國體の淵源を闡揚しつゝ聖代に生を享くる感激を新にするものゝみである。

裝幀また高貴、繕きつゝ國史の成跡を回顧し、靈山石室の珍藏に接する事が出來て、實に偉觀である。（京都小林寫眞製版所發行定價貳拾五圓、二百部限定出版）（中村直勝）

京都古習志

井上頼壽著

民俗學は新しい國學としてあるべきであるとの柳田國男先生の言葉は深い含蓄をもち、われ〳〵に種々の示唆を與へるものである。この言葉の意味づけを今こゝで取上げるのは適當ではないが、想へば民俗學的自覺、民間生活の諸現象への注意の高まつたのは、端的に言つて所謂國學の勃興と相前後して來り、實に先づ國學者流の手に育てられたことから、次第に成長して今日の繁榮を築くに至つたのである。民俗學の史學史的反省はこれらの學者の存在を大きな價値をもつて見出すであらう。このことは併しながら偶然ではなかつた。國學と言ふ語によつて理解されるところはやがて民俗學の據つて立つべき地盤であつたからである。

京都古習志の著者が明治の偉大な國學者の家に生れ、その薫陶を受けたことも、從つて又極めて自然な成行であると言はなければならぬ。のみならず著者は稀に見る優れた民俗採集家として同學の間に常に推服されてゐるところであり、育英の激務の傍、寸暇を利して山城一圓はおろかその周圍の諸國村里を殘る隅なく跋渉し、多年蒐集の資料は公にされる日を早くから期待されてゐたものであつた。さうしてその要望に對へたのが先に京都民俗誌であり、今又第二勞作として本書を編まれたのである。洵に同慶の至りに堪へない。

本書の内容は二部をなしてゐて、一は神社祭祀の氏子組合である宮座に就いて、他は同じく信仰地緣集團なる講に關する資料集である。故老の傳承を忠實に記錄し、土地の言葉を重んじ、加ふるに手づから撮した寫眞四十五葉を挿んで作られた菊版四百頁は、讀み難いばかりにぎつしりと組まれてはゐるが、讀者には快い苦痛を與へるであらう。

常々感じてゐたところであるが、本書によつて更に教へられた一二を擧げれば、從來民俗學に關する勞作には大體二つの型があつた。强ちこの學問のみに限らないが一は調査報告書、資料集であり、他はそれらの正當なる理解に基いてなされた論考である。われ〳〵の望むところは後者にあるのであるが、前者も共に重要な事業であることは言ふまでもないことである。併しながらこれらは屢々無批判に混同され、極めて頑迷な論法をもつて世に横行し、爲めに民俗學の發達を阻害して、他の歴史諸科學より低次的だとの誤解を生ぜしめるに至つてゐる。これは全く事に携る者の偏執な鄕土意識と資料そのものゝ親昵性による輕率な取扱ひとに基いてゐるのである。從つて一般には報告は報告として、本書の如く純粹な形態のまゝに取出されることが、學問を推し進める上にどれ程强力な且つ忠實な方法であるかを如實に示してゐる。

又民俗學の資料として知られるところは、飛び〳〵に點在してあり、著しく偶然に左右されてゐたと云へる。偶然は必ずしも非難さるべきではないが、恣意的に所在と形態とを示されても、それ自身の持つ歴史地理的な地盤を固めることが不充分であつたが故に、その上に築かれた民俗學が砂上の樓閣の如くに危ぶまれ來つたことは反省すべきところであつた。夙に地方的な統一ある調査の要請される所以であつたのである。さうした中に本書が山城を中心とする文化圈の劃地的な報告書の役割を果すべく現れたことは、一層意義あるものであると云へる。

たゞ望蜀の嫌はあるが、記述に精粗のあることは遺憾であつた。今日の民俗學は共同の財産として調査に必要且つ充分な項目が劃てられてある。これを顧慮されたならば、本書は一段と利用價値を高めたであらうと想ふ。（菊版四〇〇頁、五〇〇限定自費出版、四、五〇）（平山敏治郎）

滋賀縣八幡町史

滋賀縣蒲生郡八幡町編

近江八幡の地は古くは大島鄕と呼ばれ、近江國中に於いても最も早く開けたところであるが、平安の中期比牟禮八幡の社が勸請せられて以來、これを中心として莊園が發達し、中世の終に至つては商工業の興隆既に見るべきものがあつた。天正十三年豐臣秀次が八幡山に城を築き、城下に安土の町民を移し住まはせるに及んで、はじめて近世都市の形態をとり、德川時代に入ると共に蚊帳、綿織物、疊表等の商工業大いに榮え、所謂近江商人の本場としてその商人は關東奥羽より遠く北海道にまで赴いて活躍した。その結果そこに蓄積された資本はこの町を領有した朽木藩や尾張藩の財政の上に重要な役割を果した。明治以後近代的産業への轉換に立遲れた爲に、今日に於いてはむしろ地方の一小都市として、多く顧る人もないかの如くであるが、その歴史はわが國に於ける都市發達の一典型として頗る興味深いものがある。

今次、同町に於いて開町三百五十年を記念して編纂せられた町史上中下三卷、上卷は通說として、上代より現今に至るまで町の發達を記し、中卷は志表として、人文地理志、町政志、神社志、